2026年度　入学試験問題

国　語

（第4回）

［注意］

1．試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

2．解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。

3．解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

4．問題冊子の余白等は自由に使って構いません。

5．試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学付属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、本文には一部省略した部分があります。

スティーヴン・スピルバーグ監督が2018年に公開したSFアクション映画『レディ・プレイヤー1』は、「オアシス」と呼ばれる※VR世界での人々の交流を描いたものです。舞台は近未来、貧富の差が進み、人々が現実に希望を見出しづらいなか、VRゴーグルを被るだけで誰もが何者にでもなれるのが「オアシス」でした。そこで、主人公のウェイドは、アルテミスと出会い、恋に落ちてしまいました。その2人がダンスをしながら言葉を交わします。

ウェイド　リアルで会えない？
アルテミス　幻滅するよ
ウェイド　しない　君が好きだ
アルテミス　知らないくせに　これは仮の姿　本当はこんな体でも顔でもない
ウェイド　関係ない　君の本名は？　ぼくはウェイド　本名は…
アルテミス　やめて　正気？　本名なんて言っちゃダメ
ウェイド　君は特別だ
アルテミス　知らないくせに　会ったこともない
ウェイド　君を知ってるよ　好きなんだ　（中略）君に恋してる
アルテミス　勘違いよ　この姿は私が見せたい自分　それに恋してるの

――『レディ・プレイヤー1』より

この2人の会話は、仮想空間における「顔」の問題をありありと表しています。①なぜウェイドは、仮想空間ではなく、リアルでアルテミスに会いたいのでしょうか。※アバターは、現実世界の人間と比べてまったく遜色のない自然な表情や動きを体現しています。そのため、仮想空間はコミュニケーションの質が低くてもどかしいからリアルで会いたい、という理由ではないでしょう。なぜ仮想空間の中でデートするだけでは満足できないのでしょうか。

おそらくその答えは、ウェイドの「君は特別だ」という言葉に対する、アルテミスの「知らないくせに」という返事の中にあるのかもしれません。現実世界における彼女の素顔を知りたいと強く思うウェイドの気持ちと、素顔を知らないのに、②そんなことを言うのは勘違いだ、というアルテミスの気持ちが交錯するのは、「素顔を知る」ことが両者にとって重要な意味を持つからです。なぜ、私たちはそこまで素顔にこだわるのでしょうか。

哲学者の鷲田清一は、『顔の現象学』という著作の中で素顔について以下のように考察してい

ます。

われわれがある顔を素顔としてとらえるときには、その背後に、一つの人称的な存在、「だれか」（＝人格）としての自己同一性と連続性とをもち、顔の外面性に対しては内面性としてとらえられるべき存在が透かし見られており、そういうものとの関係のなかで顔がとらえられているわけである。素顔においてはだから、〈顔〉は〈わたし〉との関係のなかで組織されているのである。

――鷲田清一著『顔の現象学』（講談社学術文庫、１９９８年）、55頁より

A、この考えを先ほどの映画に当てはめると、素顔というのは、アバターのような仮面とは異なり、その人の内面と同一線上にあるために、相手の内面を深く知るためには、どうしても素顔を通して関わりたくなるのです。また、素顔を知られていない状態においては、自分の内面性を本当には理解していないから、あくまで仮想の関係性だというわけです。

B、鏡や写真の登場により、他者目線に基づく自分の顔の認識・評価というものが自己意識の中に入り込んできたことにより、素顔は単に内面を透かし見せるものではなく、内面に大きな影響を与えています。そうなると、なおさら〈素顔〉が〈わたし〉を具象化するものとして、重要性を増してくるわけです。

それでは、そもそも③顔がなければ、私たちの自己はどうなってしまうのでしょうか。

この問題を徹底的に掘り下げたのが、１９６４年に出版された安部公房の小説『他人の顔』です。この小説の主人公は、化学実験中に液体空気の爆発により顔全体に大やけどを負って顔を喪失してしまいます。包帯で覆われた顔に対する周囲の反応に悩んでいたところ、さらに妻に拒否されたことに強いショックを受けるのです。そこで、他人の顔を模った精巧な仮面をつくり、それを被って別人物をよそおって妻を誘惑します。その後、妻と「仮面の男」と「素顔の自分」という三角関係に耐え切れなくなった主人公は、すべてを書き記したノートを妻に見せました。ところが、妻は、仮面の正体が主人公であることを最初からわかっていた、という手紙を残して去ってしまいました。打ちのめされた主人公は、仮面を被り、拳銃を手にして妻を待ち伏せるところで物語は幕が閉じます。

この小説は、人間という存在のなかで、顔というものがいかに大きな比重を占めているかを浮き彫りにしています。まず、主人公は顔の喪失により、周囲のよそよそしい、上辺だけの反応に強いショックを受け、顔に「ぽっかりと深い洞穴が口をあけた」ような幻覚に襲われます。すると医者のＫ氏は主人公に語りかけます。

「顔というのは、つまり、表情のことなんですよ。表情というのは……どう言ったらいいか……要するに、他人との関係をあらわす、方程式のようなものでしょう。自分と他人を

結ぶ通路ですね」（中略）

「人間というやつは、他人の目を借りることでしか、自分を確認することも出来ないものらしい。（中略）通路をふさぎっぱなしにしておくと、しまいには、通路があったことさえ忘れてしまうものなのです」

――安部公房著『他人の顔』（新潮文庫、１９６８年）、37、38頁より

これらの言葉が意味するのは、自分の存在というのは、他者の反応を通して想像するしか知りえないもので、それを媒介する顔を失うと、自分の存在すら揺らいでしまうということです。つまり、顔の喪失は、社会との関係だけでなく、自己すら消滅させかねないわけです。

そして、④小説の主人公は、他人の顔を模った精巧な仮面を被ります。［　C　］、彼はとてつもない解放感を感じ、それをこう表現します。

「ぼくは、名前も、身分も、年齢もない、仮面の陰に身をひそめ、自分だけに保証されたその安全さに、勝誇ったような気分になっていた。連中の自由が、磨りガラスの自由なら、ぼくのは完璧な透明ガラスの自由だ」

――安部公房著『他人の顔』（新潮文庫、１９６８年）、２１４～２１５頁より

ある意味、素顔は私たちを一つの自己に縛り付けていると言えます。仮面を被ること、仮想空間でアバターを使うこと、偽物の顔写真を使うことにより、素顔にとらわれている自己から解放されるのです。

しかし、⑤本当に仮面は自己を解放するのでしょうか。鷲田は、『顔の現象学』の中で、ディディ＝ユベルマンの見方を取り上げています。

> たしかに仮面はひとの顔を覆い隠しはするが、そのとき仮面は、顔を覆うことによって、その顔が隠しているものをあらわにする。
>
> ――鷲田清一著『顔の現象学』（講談社学術文庫、１９９８年）、１１７頁より

本節の冒頭で紹介したアルテミスのセリフにも、「［　D　］」とあります。仮面やアバターには、自己が抱える願望や葛藤がうつし出されており、本当の意味では自己から解放されてはいないのではないでしょうか。

つまり、素顔であれ仮面であれ、外面は常に自己の内面と深い関わりを持っており、しかも、その自己の内面は、外面の影響を受けて容易に変化する、※可塑的で不安定なものなのです。そして、いずれの外面も、他者の反応から自己の顔を想像するという点で、自己と他者の関係性からつくられる想像的共有物なのです。しかし、⑥それがないと、私たちの自己は不安定になり、他

者との関係も上手く機能しなくなるのです。つまり、本物の顔であれ偽物の顔であれ、「顔」というものは、私たちが社会で生きていくうえで、必要不可欠な通路なのです。

（中野　珠実『顔に取り憑かれた脳』より）

※VR……virtual reality（バーチャルリアリティ）の略語。利用者に現実感を伴う仮想的な世界を提供する技術。

※アバター……仮想的な空間において、自分の分身として表示されるキャラクターのこと。

※可塑的……粘土のようにやわらかく、形が変わりやすいさま。

問1　空らん［A］～［C］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1　すると　2　なぜなら　3　さらに　4　しかし　5　たとえば　6　つまり

問2　――線①「なぜウェイドは、仮想空間ではなく、リアルでアルテミスに会いたいのでしょうか」とありますが、筆者はなぜだと考えていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　仮想空間の中にいるアバターは現実空間の人間と比べると表情や動きがぎこちないから。

2　アバター越しではアルテミスとの仲を今以上に深められないと考えたから。

3　仮想空間だけでなく、現実空間でも希望に満ちた生活を送ってみたいと考えたから。

4　素顔を見せ合うことで、仮想空間でのコミュニケーションの質が高まると考えたから。

問3　――線②「そんなことを言うのは勘違いだ」とありますが、「勘違い」とはどういうことですか。「勘違い」と言える理由も含めて筆者の考えを六十字以内で説明しなさい。

〔下書き用〕

10　20　30　40　50　60

問4　――線③「顔がなければ、私たちの自己はどうなってしまうのでしょうか」とありますが、筆者はどうなると考えていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　顔は自分の存在を認識するのに必要な他者の反応を左右する材料の一つであり、それが失われれば自己の存在さえも消えてしまうと考えている。

2　人間は顔を通じてその人が何者であるかを判断しており、それがなければ周囲から社会の一員として認められず孤立してしまうと考えている。

3　顔は人間が自分という存在を考える上で大きな比重を占めており、それがなくなれば自暴自棄になって周囲の人間を攻撃するようになってしまうと考えている。

4　人間は顔を他者とのコミュニケーションの道具として使っており、それがなくなれば他者との間に深い洞穴が開いたような幻覚にとらわれてしまうと考えている。

問5　――線④「小説の主人公は、他人の顔を模った精巧な仮面を被ります」とありますが、主人公はなぜ他人の顔の仮面を被ったのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　顔の造形を妻の好みに寄せることによって、妻との関係を修復しようとしたため。

2　自分がどんな願いや悩みを抱えているのかを客観的に知ろうとしたため。

3　別の人間の顔をよそおうことによって、他者とつながるための新しい通路を開こうとしたため。

4　かねてから周囲の人間とうまく関係を築いてこられなかった自分という存在そのものから逃れようとしたため。

問6　――線⑤「本当に仮面は自己を解放するのでしょうか」とありますが、筆者がこのように言う理由を述べた次の文の空らん［　　］にあてはまることばを文中から十一字でぬき出して答えなさい。

仮面は自己を解放すると言っても、結局［　　］が反映されてしまうものだから。

問7　空らん［　　D　　］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　本当はこんな体でも顔でもない　　2　本名なんて言っちゃダメ

3　知らないくせに　　4　この姿は私が見せたい自分

問8　――線⑥「それがないと、私たちの自己は不安定になり、他者との関係も上手く機能しなくなる」について次の問いに答えなさい。

(1)「それ」が指す内容として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　自己の顔　2　自己の願望　3　自己の内面　4　自己と他者の関係性

(2)　この部分と同様の主旨（しゅし）が書かれている部分を三十字でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

問9　本文の内容として**ふさわしくない**ものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　アルテミスにとって重要な「素顔を知る」ことが、すでに恋に落ちたウェイドにとってはさほど重要ではない。

2　筆者は『他人の顔』の主人公が襲われた幻覚を、他者の反応がなくなったことで自己が消滅してしまうことの表現として解釈している。

3　素顔にはその人の内面がにじみ出てしまうが、仮面やアバターもその人の願いや悩みを反映している。

4　人間は他人の反応等を通じて自分の顔を想像するが、その顔はいつもまったく同じであるものとは言えない。

2　次の文章は永井龍男「黒い御飯」（大正十二年発表）の全文です。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、用字・かなづかいは改めました。

小学校も卒える事が出来ずに、小さい時から工場通いをし続けてきた兄が、工場の帰りにカバンを買って来てくれた。A社の※給仕に出ている二番目の兄がそれへ名前を書いてくれる。

そうして明治何年かの四月一日、母はいそいそした私の手を引いて小学校の門をくぐった。私はきっと、次兄の着古した※紺がすりの縫い直したのを着、新しいごわごわの袴と、新しいカバンと新しいぴかぴかする帽子をかぶって、しかし、傍の者から見た私の姿は、①袴にはかれ、帽子にかぶられ、カバンに下げられていたに違いない。アきっとその日は好い天気であったろう。

父は体が弱かった。八、九年も、同じ印刷所の※校正係りをつとめていた。その間に、他の仲間達はどんどん好い位置を占め、社も発展していった。しかし父はいつもガラス戸のはまった寒い、暑い校正室の中で、赤い筆を持っていた。

――私はよくそこへ、夜業のある時などにお弁当を届けに行った。蚊をつぶした新聞紙のようになった、校正刷りが沢山あって、印刷所特有の、鉛や、紙や、インキの湿った臭いが、薄暗くなった狭い室の間にただよっていた。

明かり取りのすりガラスが鉛色に明るく、夕暮のもつ蒼さに透いて、やせた父の頭の上に四角くあった。

「とうさん、ほんの一寸しか箸をつけなかったんだが、お前たべないか」

ある時（あるいは二、三度ばかり）父はそう云って、昼に弁当屋からとった弁当の残りを差し出したことがあった。平生私は、父をけちんぼだと思っていた。父がけちんぼなのを考えると悲しくなることもあった。薄暗くなった室の内で父の視線と私の顔が合った時、私はそれをよけて不機嫌に云った。

「たべない」

私は憂鬱になった。イどうしてこんなことをする父であろう。残ったものなんか、さっさとやってしまえばよいのに。私は※横町の家へ帰ってからも、つまらなかった。

家からその印刷所へ行く迄の十五分ばかりの道に、そこには※活動写真などもあるのだが、五日おきに縁日がたった。恰度、お弁当を持って行く日が縁日であったことがある。縁日には、近所の子供達が申し合わせたように、二銭ずつ貰うのが例であった。私も、昼間のお小遣いを貰わないかわりに二銭ずつ貰った。その日はお弁当を持ってそこへくる迄、縁日を忘れていた。無論、昼間の分はつかってしまった私は、はっとした。母はもう一銭しかくれない。皆が二銭ずつ持っているのに、自分には一銭しかないということは、どんなに寂しいことであろう。

「父にねだってみよう」

道を歩きながら私は考えた。それはかなり云いにくい、望みの無いことだった。父はけちんぼ

だったから。

包みからお弁当を出して、もじもじしていたが、思い切って云って見た。父はがま口から※二銭銅貨を出して、私の手の平へのせてくれた。あの大きな重い二銭銅貨を。（こんなことのあったせいであろうか、今でもあの不便な二銭銅貨は、ひと昔とでも云ったような懐かしい重みを持っているように感じられる）そうして、②その夜は※大尽にでもなった気で縁日を歩き廻った。

父は小心な、曲がった事の出来ない（しかし道で拾ったぼっちりの金ならば、そっとしまっておくような）ほんとうの小人であった。［A］者の私は父を※吝嗇な人と思っていた。しかし、父はそれより仕方なかったのだ。父は咳が出た。それには永い間薬がいった。それに、私達のような暮らしをしている者には、明日の保証が一寸もないのだ。殊に父のような病弱な人には、その感じが強かったであろう。

「もし明日にでもどうかしたら……」

何事に対してもまず父の頭へはそうした言葉がひらめいたであろう。父は少しずつ、少しずつ、恥ずかしい程少しずつ貯蓄をした。

頬のこけた、髭をはやした顔、そして自分で染め直した※外套を着て、そろそろ、そろそろ、下駄を引き摺るようにして歩いてくる父の影が、私の心へ蘇る。それは、もうかなり病が重くなってからの姿だ。父はいよいよ動けないという日まで勤めた。

虎ちゃんという、いつも a頓狂なことを云って笑わせる私の友達の八百屋の子は、私達の仲間の前で突然こんなことを云ったことがある。

「たっちゃんとこのお父つぁん、偉いんだってさあ！」

「何故？」

仲間達の顔と顔を見比べる虎ちゃんの悪戯な顔を、私は薄気味悪く、そして間が悪げに見詰める。

「だって、髭をはやしているんだもん！」

そう云って虎ちゃんは、げらげらと高笑いをする。

「ちぇっ！　髭をはやしているもんはどうして偉いの、ええ、虎ちゃん」

私は激しい恥辱を感じて突っ掛かって行く。すると他の仲間が、とぼけた事を云う。

③「あたい、髭をはやした電車の運転手を見たことがあるよ」

そう云う私達の、子供らしい皮肉のまじった会話は、私の父が b大儀そうに社から帰ってきて、私達や仲間の傍を通って行った跡の、夕暮の中で交わされたような気がする……。

④しかし、余り父の事を語りすぎた。

その明治何年かの四月一日の夜、私達一家はお膳をとり囲んでいた。ウ話題は私の初登校のことであったろう。父は時々酒を飲んだ。その夜も一本の酒が父を上機嫌にしていた。「御屋敷の御婆さん」と母達に呼ばれている、昔※御殿女中をしていた義母に育てられた父は、酔うと余計に※切り口上になった。私は私が一家の内で大変幸福者であることや、従って一生懸命に勉強し

なければならないこと、皆の恩を忘れてはいけない事などを、説き聞かされて涙ぐみながら御飯をたべた。私達の前にはひっそりしたおかずがある。こうした父の説教は一度や二度のことではなかった。私はそれが大嫌いであった。自分だけがうんと重荷を負わせられているような気がして堪らなく憂鬱になる。泣き虫の私の眼から溢れる涙は貧乏に生まれついたのを怨めしく思う涙で、決して病気と戦い、生活と戦う父や、一年中手の平のざらざらしている母や、小さな時から工場や会社へ勤めつづけてきた兄達への、感謝の涙ではなかったのだ。

母は、一同の食事の終わる頃に、私の学校へ着て行く普段着が、余りに汚れていることを思い出した。そして、次兄の古いかすりがあるが、あれではあまりひどいと思うとつけ加えた。母はそれを縫い直してくれようかと云うのだ。父はその紺がすりを見た。それは大分色が落ちていた。父はそれを染めてやるという。母は危ぶんだ。紺がすりを丸染めにしては、変なものになってしまうからだ。しかし父は受け合った。

「子供の着るものなんか、さっぱりしていさいすればなんでも好いんだ。あした少し早く帰ってきて俺が釜で染めてやる」

父には、自分のやけた外套を染め直した経験があった。

狭い台所は、釜から登る湯気で白かった。たすきをかけた父が、湯気の中で動いている。引き窓を見上げると星がもう光っている。

釜の下では薪がぼうぼう燃えている。釜の中には黒い布と黒い湯とがにえたぎっている。父の手首も黒い。（父は一生懸命になると、よく鼻汁が髭を伝わった。自分の眼鏡の蝶つがいを外して、細工をした時などの様子が眼についている）

さて、そのまた翌日のことだ。綺麗好きの母が、あれ程よく洗った釜で炊いた、その御飯はうす黒かった。

うす黒い御飯から、もうもうと湯気が上がった。

⑤「赤の御飯のかわりだね」

誰かがそんな事を云う。染められた紺がすりは、まだ乾き切らずに竿にかかっていた。

エ幾日かの後、私はその染め直した妙な紺がすりを着て、一年生の仲間に入っていたことであろう。

⑥私も、「前途有望な少年」であったのだ！

※給仕……会社・役所・学校などで細かい雑用を仕事とした人。

※紺がすり……かすりは織物や染め物で、輪郭がかすれている模様を規則的に配したもの。ここでは紺地のかすりで作られた上着のこと。

※校正……印刷物を作る工程で、文字の誤りや、体裁を直していく作業。

※横町……表通りから横に入った細い道。また、そこにある町並み。

※活動写真……映画のこと。特に無声映画時代の言い方。
※二銭銅貨……現在の五〇〇円硬貨より一回り大きく、重さは倍ほどある。単純には換算できないが、明治時代後半の二銭は現在の二〇〇円前後と思われる。
※大尽……金持ちで、遊んで暮らすことができるような人。
※吝嗇……ひどく物惜しみすること。けちなこと。
※外套……外出するとき防寒・防雨のために衣服の上に着る衣類。オーバーコート。
※御殿女中……宮中や将軍家・大名の奥向きに仕えていた女中。
※切り口上……一語一語はっきり区切って言う、改まった口調。

問1　――線a「頓狂なこと」、b「大儀そうに」の文中での意味として最もふさわしいものを後の1～4から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

a「頓狂なこと」
1　根も葉もないこと　　2　油断もすきもないこと
3　突拍子もないこと　　4　身もふたもないこと

b「大儀そうに」
1　いそがしそうな様子　　2　だるそうな様子
3　はずかしそうな様子　　4　えらそうな様子

問2　――線①「袴にはかれ、帽子にかぶられ、カバンに下げられていた」とありますが、これは私のどのような様子を表していますか。次の文の空らん［　　］にあてはまるように十字以内で答えなさい。

私の［　　］様子。

問3　～～～線ア～エは推量の表現です。このうち一つだけ、推量している時点が異なるものがあります。ア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

問4　――線②「その夜は大尽にでもなった気で縁日を歩き廻った」とありますが、これはどのようなことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　不覚にも縁日に持っていくお金が母からもらった一銭だけになってしまったが、思いがけず父からも重量感のある二銭銅貨をもらえて充足感と優越感を得ていること。

2　父の弁当を届けようとして縁日を忘れた私はお駄賃として父から二銭銅貨をもらうことを思いつき、うまくいった高揚感から文字通りお祭り気分になっていること。

3　縁日を忘れ、お金も使い切ってしまうという絶望感に見舞われていたが、けちな父が二銭銅貨をくれるという奇跡が起き、その意外な幸運に舞い上がっていること。

4　私は友達と約束していた縁日の二銭を用意できずに劣等感をいだいていたが、この日だけは父から存在感のある二銭銅貨をもらってお金持ち気分になっていること。

問5　空らん［A］にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　幸福　　2　不幸　　3　孝行　　4　不孝

問6　――線③「『あたい、髭をはやした電車の運転手を見たことがあるよ』」という会話文はどのようなことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　子供の経験により、髭の人は偉いことをあげて私の父をほめているということ。

2　私をやっつけるため、髭の人の例をあげて私の父をばかにしているということ。

3　純粋な正義感により、他の職業の人をあげて虎ちゃんを戒めているということ。

4　真意はいざ知らず、知っている人をあげて虎ちゃんに同調しているということ。

問7　――線④「しかし、余り父の事を語りすぎた」と言うのはなぜですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　ここで語るべきことは父のさみしいありさまについての思い出ではなく、貧しい中、私を育ててくれた父をふくむ家族の思いだと思ったから。

2　父の身体が弱かったことを公にして語るのはしのびないと思っていたのに、感情があふれてつい語ってしまったことを悪かったと思ったから。

3　病気がちだった父について語ってしまったが、紺がすりを染め直すくらい元気になった父を支えた家族の思いを語るべきだったと思ったから。

4　私は結果として学校にも行けるようになったのだから、家族を十分に養えなかった父のことを今さらくわしく語るべきではないと思ったから。

問8　――線⑤「『赤の御飯のかわりだね』」という会話文は、どのようなことを表していますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　貧乏であったためおいしい「赤の御飯」を食べたことがなかった一家が、父の苦労の結晶である「黒い御飯」を食べて我慢していく決意をしたということ。

2　貧乏の象徴である「黒い御飯」とは逆の意味をもつ「赤の御飯」を思い浮かべることによって、貧乏から脱出することを家族みんなで強く願うということ。

3　貧乏だった私の一家は、母の失敗でうっかり炊いてしまった「黒い御飯」を「赤の御飯」に見立てて笑うことができるような幸せな家族だったということ。

4　貧乏な暮らしのすえにできてしまった「黒い御飯」ではあるが、本物の「赤の御飯」があるのと同じくらい喜ばしいものだと家族が祝ってくれたということ。

問9　――線⑥「私も、『前途有望な少年』であったのだ！」とは、私が小学校に行かせてもらえた理由を言ったものと考えられます。では、当時の私は小学校に行かせてもらえる境遇をどのように感じていましたか。最もよく表している一文を四十字以内でぬき出し、はじめの五字を答えなさい。

3　次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

六月の雨　　中原　中也

またひとしきり　午前の雨が
菖蒲のいろの　みどりいろ
眼うるめる　面長き女
たちあらわれて　消えてゆく

たちあらわれて　消えゆけば
うれいに沈み　しとしとと
畠の上に　落ちている
はてしもしれず　落ちている

お太鼓叩いて　笛吹いて
あどけない子が　日曜日
畳の上で　遊びます

お太鼓叩いて　笛吹いて
遊んでいれば　雨が降る
※櫺子の外に　雨が降る

（『在りし日の歌』より）

※櫺子……ここでは格子窓のこと。

問1　この詩の形式を次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　文語自由詩　　2　文語定型詩　　3　口語自由詩　　4　口語定型詩

問2　この詩について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　くり返しの表現を用いることで情景を印象づけている。
2　擬人法を用いながら色彩ゆたかな情景を表現している。
3　対句を用いて刻々と変わりゆく雨の様相を描いている。
4　直喩を用いて情景を描くことで五感に働きかけている。

問3　――線「落ちている」とありますが、何が「落ちている」のですか。詩の中から一語でぬき出しなさい。

問4　第一連、第二連について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　雨の中に浮かんでは消える女性のイメージが、さみしく悲しげな心情とつながっている。

2　雨が止むと共に現れた女性のイメージが、晴れやかな心情とつながっている。

3　雨が止んで帰っていった女性の存在が、悲しみが募っていく心情とつながっている。

4　雨が降る前から来ている女性の存在が、たのしくおだやかな心情とつながっている。

問5　第三連、第四連について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1　雨に降りこめられて仕方なく家の中で遊ぶ我が子の様子を描くことで、子供のどうにもやるせない思いを表している。

2　内、外の世界は対照的であるが、「樋子」によってそのふたつの世界がゆるやかにつながっていることを表している。

3　楽しげな太鼓と笛の音を表現することで、詩の前半と完全に切り離された世界であることを表している。

4　子を女と対照的に描くことによって、詩の前半の世界と後半の世界が完全に一致していることを表している。

4　次の各問いに答えなさい。

問1　次の各文の――線部のカタカナを漢字で書きなさい。

1　彼は海洋生物学をセンモンに研究している。
2　ショシ貫徹で困難を乗りこえる。
3　彼女は五年生の時に、学級委員をツトめた。
4　現代の社会キコウが抱える問題を話し合う。
5　同じようなケースはマイキョにいとまがない。

問2　次のそれぞれの四字熟語の空らん□にあてはまる漢字一字を答えなさい。また、四字熟語の意味を後の1～7から選び、それぞれ番号で答えなさい。

①　同□異曲
②　温故□新
③　一衣帯□
④　絶□絶命
⑤　□和雷同

1　性格が穏やかで情に厚く、誠実であること。
2　昔の物事を研究し、そこから新しい知識や見解を得ること。
3　自分の意見が無く、人の言動に調子を合わせること。
4　見た目は違っているが、手法や技術に大きな差がないこと。
5　多くの人々の意見や考えが一致すること。
6　どうしても逃れられない困難な場面、立場にあること。
7　せまい川や海峡などによってへだてられ、近接していること。